

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月31日現在

機関番号：14301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2010～2012

課題番号：22653107

研究課題名（和文） 「NHK青年の主張」における青年文化のメディア社会学

研究課題名（英文） Media-sociology of youth culture on the national speech contest  
"NHK Seinen no Shuchou(youth's opinion)"

研究代表者

佐藤 卓己 (SATO TAKUMI)

京都大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：80211944

研究成果の概要（和文）：本研究では20世紀日本を代表する国民的メディア・イベントの分析を通じて、青年文化の変容を検討した。《NHK・青年の主張全国コンクール》（1954年—1989年）の優秀作品をデータベース化し、量的および質的に分析した。また、関連資料の分析から日本社会における「青年」への眼差しの変化を明らかにした。その結果は『青年の主張—幸福感のメディア史』（仮題）として河出書房から出版の予定である。

研究成果の概要（英文）：In this research, the change of youth culture in the 20th century Japan was considered through the analysis of a national media event, "NHK Seinen no Shuchou(youth's opinion)". The prizewinning speeches of the national speech contest (1954-1989) was put in a database, and was analyzed quantitatively and qualitatively. Then, some changes of the Japanese view to the "youth" were clarified from analysis of mass media. The result is scheduled to publish from the Kawade Shobo as "The Youth's Opinion; Media-history of Sense of Well-being" (working title).

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,000,000	0	1,000,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,400,000	420,000	2,820,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学、教育社会学

キーワード：青年問題、メディアイベント、放送番組、NHK、弁論、青年文化、修養主義

### 1. 研究開始当初の背景

応募者は、これまでメディア史、大衆文化論の領域でメディアと青年文化の研究を蓄積してきた。

特に本研究の直接的契機は、1950年代テレビ普及期の「一億総白痴化」論を放送教育

運動の視点から再検討した「基盤研究C：放送メディア教育の成立と展開」平成18-20年度である。その成果は『テレビ的教養』（佐藤卓己、NTT出版、2008年）であるが、この研究の過程で「NHK青年の主張」関連の記事に触れ、この国民的メディア・イベントの重要性に関心を抱いて資料収集を続けて

きた。だが、先行研究としては演説コミュニケーション史として概説的言及（芳賀綾『言論と日本人』講談社学術文庫、1999年）があるのみで、まとまった研究は国内外において存在しない。それゆえ、2008年度若干の準備的調査を行い、以下の報告書をまとめた。佐藤卓己「《NHK青年の主張》における幸福感のゆくえ」（子安増生編『心が生きる教育に向かって―幸福感を紡ぐ心理学・教育学』2009年）。

これまでの青年文化研究は、教養主義と結びつく学生文化（竹内洋『教養主義の没落―変わり行くエリート学生文化』2003年など）か、大衆文化の消費者たるヤンキー文化（難波功士『ヤンキー進化論』2009年など）かを中心に進められてきた。本研究では、その両極で周辺化される教養主義的な勤労青年文化の動きに焦点を当てる。今日「大学全入時代」の掛け声の中で、この勤労青年文化の存在はますます見えにくくなっており、グローバル化、格差社会化の中で最も影響を受けやすい集団である。社会教育の見地からすれば、勤労青年の幸福感こそ社会の安定性を規定するといえるだろう。この勤労青年が「輝いた」時代のメディア・イベント分析から、青年アイデンティティの健全なる発展に資するメディア教育政策が提言できるはずである。

## 2. 研究の目的

グローバル化が進展する現在、「ワーキング・プア」「ロスト・ゼネレーション」と呼ばれる青年の就労問題とアイデンティティ危機が深刻化している。本研究はこうした状況を踏まえ、青年の勤労観とアイデンティティ形成をメディア・イベント分析から再検討し、積極的な提言を行うことを目的としている。

正式名称《NHK・青年の主張全国コンクール》は1954年に開始され、その全国大会は1989年まで「成人の日」に国民的番組としてテレビとラジオで中継放送されてきた。しかし、2005年に後継番組が打ち切られている。

この番組資料は勤労青年の文化変動を理解する上で貴重な歴史資料であり、この全国大会の優秀論文を量的および質的に分析し、比較的研究蓄積のある学生文化やヤンキー文化と異なる視点を青年文化研究に導入したいと考えた。

そうした青年文化研究は教育社会学研究とメディア史研究の二つの学際領域として扱う必要がある。特に、グローバル化が進む情報社会での青年問題解決にむけて以下の4点で卓越した成果を目ざしていた。

(1) 今日叫ばれる「ワーキング・プア」、「ロスト・ゼネレーション」の現象を、勤労青年文化の系譜から再検討することで、現代の青年就労問題とアイデンティティ危機を論じる上で不可欠な先行事例を見出すことが可能になる。

(2) 「エリート青年文化」と「ヤンキー文化」に分断された青年文化研究に対して、「修養青年文化」を配置することで、青年文化研究の統合的な視座を提供する。

(3) 戦前の「雄弁」文化に続く、戦後の「主張」文化の実態を明らかにすることで、新たな演説コミュニケーション史を提示できる。

(4) NHKが主催したメディア・イベントである「青年の主張」半世紀の変遷は、ラジオからテレビへ、そしてインターネットへと展開したメディア史を反映している。教育的機能をもつメディア・イベントの研究は、メディア研究と教育研究に分断されたさまざまな知見を統合して包括的な教育メディア史を描きだすことを可能にする。

## 3. 研究の方法

本研究はメディア史と教育社会学の学際性を強く意識しつつ、連携研究者や大学院生の協力も得ながら遂行した。NHKアーカイブに残る実際の映像を検討するとともに、NHK放送文化研究所や国会図書館などに所蔵されている放送台本などの資料も収集した。さらに、1960-70年代、第14回（1967年度）大会から第24回（1977年度）大会まで11年間分の入選作品1249本は自由国民社（一部はエール出版）から公刊されている。この1249作品のデータベースを構築した。さらに、周辺資料の収集・整理を行い、これもデータベースに追加した。

月例の研究会では戦後の青年文化論、社会教育論を中心に先行研究を報告、討議するとともに、データ分析の方法についても検討した。

また、全国コンクール参加者やイベントを担当したNHK関係者へのヒアリングを行い、その証言をオーラル・ヒストリーとして記録した。

## 4. 研究成果

1954年に開始された「NHK青年の主張コンクール」は日本におけるテレビ放送の発展史と重なり合うメディア・イベントである。この番組中継は1990年に《青春メッセージ》と改名され、新時代への対応を模索したが2004年の50周年で番組は打ち切られている。半世紀にわたって続いた国民的イベントの

分析から、日本の「青年」に対する眼差しの変容を明らかにしている。

一例として、1970年代まで「青年」は主に勤労青年を意味する言葉であり、「学生」はこれと異なる分離がされていたことも、出場者、入選者の分析により明らかになった。

「勤労青年」という存在が、1980年代以降の一億総中流イメージの中で周辺化したため、大学生が優勝することが生まれ、またジェンダー的には女性の参加が増加していった。こうして、「青年文化」が「学生文化」に吸収されていたことが、この番組の打ち切りにつながったと考えられる。そうした結果は、成果刊行物として『青年の主張—幸福感のメディア史』（仮題）として河出書房から出版の予定である。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計14件）

- ①佐藤卓己、メディア史の可能性—コミュニケーション研究との間、ヒューマン・コミュニケーション研究、査読無、Vol. 41、2013、5-15
- ②佐藤卓己、雑誌文化と受験システムの親和性、こころ、査読無、10号、2012、4-5
- ③佐藤卓己、書物がメディアになるとき—メディア史からの視点、情報の科学と技術、査読有、第62巻6号、2012、1-6
- ④鳥越俊太郎・佐藤卓己・小林弘人・津田大介、メディア融合時代のジャーナリズムの新しい可能性、放送メディア研究、査読無、第9号、2012、235-278
- ⑤佐藤卓己、“コミュニケーション史”の構想、アリーナ、査読無、12号、2011、270-274
- ⑥佐藤卓己、ラジオの歴史、てんとう虫、査読無、第43巻9号、2011、8-13
- ⑦佐藤卓己、電体主義のメディア史—電腦社会の系譜学に向けて、メディア史研究、査読有、30号、2011、1-16
- ⑧佐藤卓己、<<メディア史>>の成立—歴史学と社会学の間、関西学院大学社会学部紀要別冊（社会学部創設50周年記念）、査読無、2011、1-26、<http://hdl.handle.net/10236/7738>
- ⑨佐藤卓己、<教育番組>としてのスポーツ：歴史的考察と政治機能、月刊民放、査読無、478号、2011、14-17
- ⑩佐藤卓己、「新聞学なるものの学問としての性格」再考、京大大学生涯教育学・図書館情報学研究、査読無、第10号、2011、1-4、<http://hdl.handle.net/2433/139418>

- ⑪佐藤卓己、世論調査は国民投票か、総合ジャーナリズム研究、査読無、No. 214、2010、4-6
- ⑫佐藤卓己、世論調査の現実と公議輿論の理想、メディア展望（新聞通信調査会）、査読無、第585号、2010、1-5
- ⑬佐藤卓己、“輿論の世論化”とファスト政治、都市問題（東京市政調査会）、査読無、第101巻9号、2010、13-17
- ⑭佐藤卓己、メディア政治の中の裁判員制度—世論に惑わぬ市民のために、まなぶ、査読無、634号、2010、31-34

〔学会発表〕（計5件）

- ①佐藤卓己、メディア史の可能性、日本コミュニケーション学会第42回大会（招待講演）、2012年06月16日、京都文教大学
- ②佐藤卓己、『青年の主張』が消えた理由、関西大学すこやか教養講座（招待講演）、2011年5月28日、関西大学堺キャンパス・人間健康学部
- ③佐藤卓己、“教育=教化=宣伝”史から見た日本のテレビ文化、台湾大学音楽学研究所国際シンポジウム、2011年2月24日、台湾大学音楽学研究所（台湾）
- ④佐藤卓己、放送教育史から見た日本のテレビ文化、国際シンポジウム「20世紀東アジアにおける視聴覚メディア相互関連」、2010年12月10日、日本大学文理学部百年記念館会議室2
- ⑤佐藤卓己、“青年の主張”のゆくえ—メディア・イベントの教育論、第29回グローバルCOE主催公開講座、2010年11月24日、京都大学時計台記念館2階国際交流ホールIII

〔図書〕（計7件）

- ①辻一郎・音好宏監修、テレビの未来と可能性（佐藤卓己「教養のセーフティ・ネットの必要性—“テレビ的教養、再考”）、大阪公立大学共同出版会、2013、213-241
- ②宮本徹・大橋理枝・井口篤・佐藤卓己、NHK出版、ことばとメディア—情報伝達の系譜、2013、168-220
- ③佐藤卓己・渡辺靖・柴内康文、新曜社、ソフト・パワーのメディア文化政策—国際発信力を求めて、2012、9-23、143-176
- ④三澤真美恵・川島真・佐藤卓己、青弓社、電波・電影・電視—現代東アジアの連鎖するメディア、2012、24-50
- ⑤佐藤卓己、岩波書店、現代史のリテラシー—書物の宇宙、2012、252
- ⑥佐藤卓己、新潮社、天下無敵のメディア人間—喧嘩ジャーナリスト・野依秀市、2012年、464
- ⑦稲垣恭子編、世界思想社、教育文化を学ぶ人のために（佐藤卓己「教育のメディア幻

想J)、2011、2-25

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

佐藤 卓己 (SATO TAKUMI)  
京都大学・教育学研究科・准教授  
研究者番号：80211944

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

佐藤 八寿子 (SATO YASUKO)  
京都女子大学・現代社会学部・非常勤講師  
研究者番号：10412115